

ぼくのお母さん

小 四

ぼくのお母さんは、生まれつき耳が聞こえないので、手話を使って話します。ぼくは、生まれてすぐは、お母さんが耳が聞こえないことは、全然知りませんでした。しかし、しゃべれるようになって、生まれつきお母さんの耳が聞こえないことを知り、びっくりしました。

ぼくは、最初、手話のことは知らず、使おうとしませんでした。しかし、一年生になったころには、数字やありがとうなどのかんたんな手話を使えるようになっていて、手話が少しずつ楽し

くなりました。そうになると、さらに、手話のことを勉強し、知りたくなってきました。そして、お母さんと手話で話していると

「手話を覚えてくれて、ありがとうございます。」とたまに、よろこばれます。そうすると、ぼくはお母さんのためにもっと手話をがんばりたいと思って、たくさん練習をがんばります。そうすると、手話についてもっとときょう味をもてそうです。もっと手話について、知れると思います。だからぼくは、手話をがんばりたいと思います。家の人で、ふだん手話を使っているのは、おばあちゃん、お父さん、お母さん、ぼくです。ぼくは、ぼく以外の三人に手話を教えてもらったりします。だからその期待

にこたえるつもりで、手話をがんばっています。

「そうです。」

「この手話はこうだよ。」

「ここがちがうよ。」

などとアドバイスをしてくれるので、「ありがとう。」

と言つて、感しやの気持ちを表します。ときどき、分からない手話などが会話に出てくると、むずかしくて上手いかないけない、そんなときはいつもお母さんが教えてくれます。そのため、一度見た手話は、教えてもらい、練習をたくさんして、覚えたいと思います。それでもむずかしくて、覚えられないものもあるかもしれないけれど、最後まであきらめずにがんばりたいと思

ます。

ぼくは、この間、東京へコンサートを見に行つて、びっくりしました。そのコンサートは、耳の聞こえない人のために、サウンドハグという、ボールのようなものが、音楽に合わせてしん動したり、色が変わったりして、どんな音楽か教えてくれるというものを使ったコンサートでした。だから、耳が聞こえない人でもだいじょうぶなコンサートなので、耳の聞こえない人がたくさんいました。だけどその後、数人でお昼を食べたときは、お母さんは、他の聞こえない人と手話で話していました。ぼくは、他の小さい子たちを、馬のポーズになつて乗せて歩くというゲームが一番つかれて、楽しかったで

す。ぼくはこのようない験を、もつとたくさんして、手話を覚えていききたいです。

ぼくはお母さんに手話を教えてもらわなくても、完ぺきに使えるように、マスターするのが目標です。そしてまた、手話を使えるようになって、お母さんの通訳をしたり、耳の聞こえない人のためにできることをやったりしたいです。そして、耳の聞こえない人に信用してもらえたら、耳の聞こえない人と友だちになって、いい未来にしていきたいです。